The Journal of the Japan Association for Social and Economic Systems Studies

November 2005

大会報告論文：システムのリスクと安全を考える

生活リスクの認知と対処：自助意識および情報志向の観点から

奈良　由美子
（放送大学）

キーワード：生活リスク、リスク認知、リスク対処、自助意識、情報

1．研究目的

現代は安全で安心して生活できる社会とは言い難いと多くの生活者が感じている（例えば内閣府「安全・安心に関する特別世論調査」2004）。人間の欲求が多様となり科学技術は進歩し、社会システムの数多くの構成要素や主体が複雑に絡み合うなか、リスクは複合的に発生している。さらに従来から懸念されてきた地震などの自然災害も依然大きな脅威である。リスクをめぐっては、リスクに関わる複数の主体の視点からの学際的なアプローチが必要となるだろう。

リスクがその学際的定義を「人間の生命や健康・資産ならびにその環境に望ましくない結果をもたらす可能性」（日本リスク研究学会2000：p.13）としておさえられているように、リスクは人間との関わりにおいて問題となる。心理学や社会心理学の領域では、人間がどのようにリスクをとらえるのかについての実証研究が行われている。すなわち、リスク認知についてその構造や国際比較調査による社会文化的差異が明らかにされている（Slovic 1987, Kleinhesselink & Rosa 1991など）。また、性差や社会的地位（学歴、収入など）によるリスク認知の違いが指摘され（Flynn & Slovic & Merts 1994, Lazo & Kinnell & Fisher 2000など）、リスク評価についての専門家と一般市民とのギャップが主観的コンパラティブ・リスク/客観的コンパラティブ・リスクにより検討されている（小林・神田 2000など）。さらに、安全と安心の違いも相当に指摘されている（村上 2005など）。安全とは客観的にリスクがじゅうぶんに低い状態であり（かならずしもゼロリスクではない）、安心とは主観的にその状態を実感することである。生活者にとって、安全に裏付けられていない安心は意味がないし、じゅうぶん安全なのに安心できない状態も問題であるといえよう。これらの研究成果をふまえつつ、1990年代以降はわが国でもリスク・コミュニケーションの意義と方法についての研究が本格的に展開されている（吉川 1999など）。

本研究では、これらの知見にリスク管理の視点を入れたい。すなわち、具体的な対処のレベルも射程に入れることとする。リスクが個別の生活者のダメージに帰結することからも、各生活者のリスクに対する主体的な取り組みを促しうる手がかりを探ることが求められるためである。その際、とくにここでは、生活者の主体的な対処を促進するであろうと考えられる自助意識ならびに情報に対する姿勢（情報志向性、意思決定能力、情報収集行動）に着目し、その実態を調査データから考察する。さらに、リスク認知とリスク対処とのあいだにはなんらかの関連性があると考えられ、それも合わせて検討する。

NII-Electronic Library Service

The Journal of the Japan Association for Social and Economic Systems Studies

2．研究方法

（1）調査フレーム

わが国の生活者のリスクに対する認知および対処の要素である自助意識と情報に対する姿勢について把握するため、アンケート調査を行った。実施した調査は、筆者も研究協力者（リスク領域担当）として参加した「日常生活とインターネットに関する調査」(科学技術振興事業団さきがけ21：研究代表者は大澤幸生筑波大学助教授）であり、調査データのオリジナルは同事業団に属する。

調査の概要は以下のとおりである。①調査対象者：全国の20歳から49歳までの男女。②抽出方法：NOSパネルから抽出、性・年齢別に母集団構成比に合わせ割当てた層化抽出を行った[注1)]。③調査方法：郵送調査。④回収数：1,026票(有効回収率57%)。⑤調査期間：2002年2月25日から同年3月13日。⑥調査実施機関：日本リサーチセンター。

調査対象者の基本属性は次のとおりであった。①年齢構成：平均年齢34.96歳（20歳代31.60%、30歳代35.90%、40歳代32.50%)、②性別：女性56.37%・男性43.63%。

（2）調査項目

調査項目は、リスク認知、リスク対処としての情報に対する姿勢（情報志向性、意思決定能力、情報収集行動）ならびに自助意識である。このうち、リスク認知については、生活を送るうえで生起しうる9つのリスク（a.大地震、b.交通事故、c.株価・金利の暴落、d.ダイオキシン、e.ガン、f.インターネット上の消費者被害、g.インターネット上の名誉毀損、h.ネットストーカー、i.コンピュータウィルス）を提示し、それぞれの認知の程度を聞いた。Slovicのリスクイメージ構成要素（Slovic 1987, 岡本 1992)に依拠し、未知性(リスクの専門家による解明度、リスクに対する自分の知識）と恐ろしさ（リスク具現化による自分への被害、リスク回避の実行可能性)から構成した。具体的な質問項目は以下の通りである。①これらのリスクは、専門家によって科学的にどれくらい解明されていると思いますか（1.非常に解明されている　2.かなり解明されている　3.やや解明されている　4.あまり解明されていない　5.ほとんど解明されていない　6.全く解明されていない)、②あなたは、あなた自身がこれらのリスクについての知識をどれくらい持っていると思いますか。（1.非常に持っている・・・6.全く持っていない)、③これらのリスクが実際に発生すると、あなた自身にどの程度の被害があると思いますか。(1.非常に大きな被害がある・・・6.全く被害はない)、④あなたは、これらのリスクを自分自身の努力で事前に回避できると思いますか。(1.完全に回避できる・・・6.全く回避できない)。上の①と②がリスクの未知性因子を、③と④が恐ろしさ因子をそれぞれ構成している。

3．結果および考察

（1）リスク認知の概要

ひとびとの9つのリスクに対する認知の程度について、その結果を表1に示した。表中の平均値は、先述した各質問に対する回答選択肢のコードを点数として扱い、その平均を求めたものである。つまり、点数が低くなるほど解明度および知識を高いと回答していることとなる。また、点数が低いほど自分への被害を大きく認知していることを示し、点数が低いほど回避可能性が大きいと答えたことを意味する。いずれも、最小値1点、最大値6点であった。表1から以下のようなことが見て取れよう。まずリスクの未知性については、インターネット上のリスクに対する専門家解明度が小さく自分の知識が乏しいと認知されている。リスクの恐ろしさに関して、とくに「a.大地震」は、被害が大きいうえに回避が難しい、恐ろしさの大きいリスクとして認知されている。同じ被害程度であっても、交通事故やガンは回避可能性が大地震のそれよりは大きい。ダイオキシンは、自分の知識が小さく、被害は大きく、そして回避の難しいリスクとして認知されているようである。

なお、9つのリスク項目に対する回答の傾向を把握するため、主成分分析を行った結果、いずれ

NII-Electronic Library Service

The Journal of the Japan Association for Social and Economic Systems Studies

表1　9項目のリスクに対する認知の程度

	リスクの専門家による解明度	リスクに対する自分の知識	リスク具現化による自分への被害	リスク回避の実行可能性
	平均値（SD）	平均値（SD）	平均値（SD）	平均値（SD）
a.大地震	3.191（1.004）	3.927（1.055）	1.660（0.853）	4.783（1.157）
b.交通事故	3.304（1.150）	3.411（1.087）	1.638（0.859）	3.295（1.141）
c.株価・金利の暴落	3.420（1.079）	4.686（1.100）	3.372（1.382）	4.378（1.364）
d.ダイオキシン	2.850（1.032）	4.048（1.132）	2.512（1.139）	4.266（1.178）
e.ガン	2.814（1.062）	3.880（1.153）	1.679（0.932）	3.964（1.178）
f.ネット上の消費者被害	3.526（1.003）	4.475（1.128）	3.184（1.507）	3.364（1.381）
g.ネット上の名誉毀損	3.708（1.025）	4.613（1.101）	3.261（1.508）	3.541（1.399）
h.ネットストーカー	3.983（1.091）	4.754（1.111）	3.220（1.575）	3.688（1.428）
i.コンピュータウィルス	3.780（1.180）	4.616（1.264）	3.134（1.550）	3.885（1.469）

（n＝1093～1110）

の尺度においても、2つの主成分が抽出された。それらは、第1主成分：現実社会において発生するリスク（a.大地震、b.交通事故、c.株価・金利の暴落、d.ダイオキシン、e.ガンの5項目）と、第2主成分：インターネット上で発生するリスク（f.インターネット上の消費者被害、g.インターネット上の名誉毀損、h.ネットストーカー、i.コンピュータウィルスの4項目）であった。

これらリスク認知について、性差を確認しておくと以下のようになる。専門家解明度に関しては、大地震についてのみ有意差がみられ（t検定による）、女性のほうが男性よりも高い解明度を認知している。自分の知識については、ダイオキシンとガンをのぞいた7項目において、女性の知識保有が有意に小さくなっている。また、被害の大きさについて、大地震、株価金利暴落、ダイオキシン、ネット名誉毀損、ネットストーカーの各項目において女性が大きな被害を受けると有意に答えている。とくにダイオキシンとネットストーカーは、有意水準$p<.001$と差が大きい。回避可能性についてはほとんど差がないが、株価金利暴落では弱いながらも（$p<.05$）男性のほうが回避できると答える割合が高い。リスク認知と性差についてはいまなお一致した見解は出ていないものの、女性のほうが男性よりもリスク認知が大きいとする先行研究が多い。本研究においても、リスクの種類にもよるが、女性のリスク認知が比較的高いという結果となった。

さらに、「現在の暮らしに対する満足度」（10点満点で回答）と、リスク認知との関連について、変数間の相関係数（Pearson）を求めた結果は次のようであった。生活満足度が高いとリスクが解明されていると感じている傾向が（専門家解明$r=-.104$ $p<.001$、自分知識$r=-.067$ $p<.01$）。また、リスク回避可能性を大きく感じる傾向が（$r=-.151$、$p<.001$）、いずれも弱いながら観察された。この結果は、高学歴・高収入といった、社会的に優位な立場にあるひとはリスクを低く認知し、専門家に高い信頼を置いているとしたFlynnらの先行研究と共通していると言えよう。リスク対処には一定の資源（金銭、時間、人間関係、情報など）が必要となるが、同時にこれら資源の持ち合わせに対する総合的評価が生活満足度として表されることから、両者のあいだに相関が見られたと考えられる。同時に、リスクを低く認知していることが、高い生活満足度につながったという方向性も考えられる。ただし今回得られた相関係数の値はごく小さいため、今後も他の研究結果と合わせて考察していく必要がある。

なお本調査は、日本と米国において同じ質問紙を用いて行ったものでもある[注2)]。両国間のリスク認知の差異の詳細については割愛するが（詳細は奈良、2005を参照されたい）、統計的有意差を伴って観察された傾向は以下の3点である。①リスク

NII-Electronic Library Service

The Journal of the Japan Association for Social and Economic Systems Studies

の未知性は日本人が米国人よりも強く感じている（専門家による解明度も自分の知識も乏しいと感じている）、②リスクの恐ろしさは日本人が米国人より強く感じている（損害を大きくとらえ、回避可能性を小さくとらえている）、③情報志向性や意思決定能力ならびに自助意識は米国人のほうが高い。

（2）リスク対処の実態とリスク認知との関連

ここでは、リスク対処の実態とリスク認知との関連性を把握する。まず、情報志向性および意思決定能力については、本文末の注3に示した質問に対する回答コードを点数として扱い、それぞれの合計得点をもって把握した。点数の低いほうが情報志向性ならびに意思決定能力が高いことになる。情報志向性と意思決定能力の記述統計は、それぞれ平均値（標準偏差）が20.220（4.534）と17.501（3.829）、最大値が33.00と32.00、そして最小値はいずれも6.00であった。このようにして得られた数値を用いて変数間の相関係数（Pearson）を求めた結果を表2に示す。

表2から、情報志向性および意思決定能力が高いことと、専門家解明度および自分の知識が高いことおよびリスクの回避可能性を高いと考えることとのあいだに、それぞれ弱い正の相関があることが分かる。現実社会リスクとインターネットリスクの別にみても、その相関は同様にみられる。相関係数の値がごく小さいことからこの調査結果だけから断定することはできないものの、積極的に情報を取得し、これを合理的に検討しようとする姿勢は、リスクについてもその知識や理解や対処の手がかりを増すことにつながっていることが示唆されていると考えられる。情報志向性と意思決定能力の高いひとが被害程度も高く認知しているのは、ひとつには、このような姿勢を持つひとは、リスクについての情報に多く触れることになるため、被害についても大きく評価するようになるという方向性と、もともとリスク被害を大きいと考えており、そのリスクについて調べようとする方向性との両方による効果があるものと思われる。

表3は、自助意識についての回答結果を示したものである[注3)]。そのうえで表2から自助意識とリスク認知との関連をみると、自助意識が高いことと、専門家解明度および自分の知識が高いこと、リスクの回避可能性を高いと考えることとのあいだに、それぞれ正の相関があることがわかる。漠然とリスクに不安を感じつつ他の主体にその解決をまかせるのではなく、自助意識を高く持ち対処しようとする姿勢が、リスクに対する理解と知識を踏まえた回避行動への自信に結びつくと考えられる。

ここからは情報収集行動について[注3)]、その実態およびリスク認知との関連をみていく。表4が示すように、リスクについて情報を得るソースとしては新聞とテレビとが圧倒的に多く選ばれている。リスク別に見ると、地震の情報源はとくにテ

表2　リスク対処とリスク認知との関連

	情報志向性	意思決定能力	備えは充分に	何事も自分で	専門家解明	自分の知識	自分への被害	回避可能性
情報志向性	1.000	.306＊＊＊	.233＊＊＊	.218＊＊＊	.110＊＊＊	.298＊＊＊	.133＊＊＊	.102＊＊＊
意思決定能力		1.000	.392＊＊＊	.302＊＊＊	.087＊＊	.149＊＊＊	.124＊＊＊	.101＊＊＊
備えは充分に			1.000	.348＊＊＊	.075＊	.119＊＊＊	.090＊＊	.104＊＊＊
何事も自分で				1.000	.078＊＊	.124＊＊＊	.033	.075＊
専門家解明					1.000	.298＊＊＊	.035	.184＊＊＊
自分の知識						1.000	.078＊	.258＊＊＊
自分への被害							1.000	-.137＊＊＊
回避可能性								1.000

＊＊＊p＜.001　＊＊p＜.01　＊p＜.05（n＝1062～1089）

NII-Electronic Library Service

表3 自助意識

(%)

	1.大変あてはまる	2.あてはまる	3.まああてはまる	4.あまりあてはまらない	5.あてはまらない	6.全くあてはまらない	計
何事も自分で (n=1108)	12.27	31.95	43.68	10.65	0.82	0.63	100.00
備えは充分に (n=1106)	10.13	30.92	42.22	14.20	2.26	0.27	100.00

レビ・新聞が中心である。交通事故では若干口コミが多い。ガンやダイオキシンについては専門書に情報を求める割合が高くなる。そしてインターネット上のリスクに関しては、ウェブの割合が高くなるが、依然新聞・テレビを参考にする割合が大きい。リスク認知との関連を見ると、ウェブ・解説書・専門書などをソースとしているひとに、リスク回避可能性や自分の知識が高くなる傾向が有意に見られる。これは、情報志向性・意思決定能力の高い人がウェブおよび解説書を、ならびに自助意識の強いひとが専門書をそれぞれリスク情報源として選ぶ傾向が有意にみられることの影響と、またそのようなソースには一定の問題に特化したより専門的な内容の情報が取り扱われていることとによると考えられる。

4．意識の変革は可能か？そして必要か？—まとめにかえて—

本稿では、生活リスクに対する認知と対処についてその実態と関連を調査データから検討した。その結果、情報を積極的に取得し、起こりうる可能性や異なる立場を勘案しながら合理的にこれを検討しようとする姿勢は、生活者の持つリスクの未知性を減じさせ、またリスク回避可能性を高めることに関わることが明らかとなった。また、リスク情報をウェブや専門書など多様なメディアに求めることも、リスクの未知性とおそろしさに対する認知を低めることと関連があった。このような結果から、以下の2点がさらに検討されるべき新たな課題として指摘できよう。1点目は、個人の情報に対する姿勢や自助意識を変えることの可能性についての検討である。個人が内発的に意識を変革することは容易ではないと予想される。そこで外発的な働きかけとして、教育を含めた社会技術の開発と援用が試みられなければならないだろう。2点目は、そもそも自助意識や情報志向性を高める必要性があるのかという問題である。個人の自助意識や情報志向性が低いままでも、国ないし地域ないし家族のレベルで個人のリスクを引き受ける制度が発達しているのであれば、そのほ

表4 リスクについての情報源（3つまでの複数回答）

(%)

	週刊誌	テレビ	口コミ	ネット	新聞	解説書	専門書	その他
a.大地震	12.2	92.5	13.7	11.5	77.3	13.0	15.2	6.2
b.交通事故	9.2	76.9	21.4	6.4	66.1	9.2	6.6	15.3
c.株価・金利の暴落	17.3	81.1	9.0	12.6	76.3	12.9	11.8	4.0
d.ダイオキシン	17.5	78.9	9.2	8.9	68.9	17.1	19.2	3.3
e.ガン	17.3	51.0	15.6	12.4	42.5	33.5	42.5	10.2
f.ネット上の消費者被害	21.3	56.2	15.9	34.6	47.5	18.5	11.0	7.9
g.ネット上の名誉毀損	20.1	54.7	12.9	34.3	45.3	18.0	12.0	9.2
h.ネットストーカー	22.4	54.0	15.3	33.4	42.5	18.4	10.9	10.1
i.コンピュータウィルス	18.3	54.6	17.6	36.3	41.7	22.4	17.0	9.1
平均値	1.557	5.999	1.305	1.902	5.081	1.629	1.461	0.753
(SD)	(2.254)	(2.733)	(1.921)	(2.539)	(3.023)	(2.233)	(2.030)	(1.629)

(n=1114)

NII-Electronic Library Service

The Journal of the Japan Association for Social and Economic Systems Studies

うが全体としてリスク対処にすぐれた社会システムととらえることもできるかもしれない。実際わが国は長年そのような公助や相互扶助のなかでリスクを解決してきた歴史を持つ。リスクをめぐる複数の主体のあり方を総合的にとらえた、わが国の風土や文化に即したリスク対処が検討されなければならないだろう。

注

1）日本リサーチセンターでは毎月住民基本台帳からランダム抽出された男女個人のフレッシュ・サンプルを対象にした乗合方式での調査（NOS）を実施している。NOSパネルは、NOSの回答者の同意を得て構築したアンケート調査モニターである。

2）米国の調査フレームは以下のとおり。調査対象者：全国の20歳から49歳までの男女。抽出方法：電話番号リストより抽出（RDD）、性・年齢別に母集団構成比に合わせ割当てた層化抽出を行った。調査方法：電話調査（CATI）。回収数：1,007票。調査期間：2002年3月7日から3月24日。調査実施機関：Taylor Nelson Sofres Intersearch。調査対象者の基本属性として、年齢構成は平均年齢35.99歳（20歳代24.74%、30歳代36.04%、40歳代39.22%）、性別は女性49.95%・男性50.05%。

3）情報に対する姿勢として、情報志向性（Alpha＝.700：①どんなことでも詳しく徹底的に知ろうとする、②新しい情報を自分の仕事や生活の向上に積極的に取り入れるほうだ、③一般に、何か他人が知っていて自分が知らないことがあると非常にはずかしい、④常にメディアに接して新しい情報を得るのが好きだ、⑤流行の変化には注意している、⑥最先端の話題についての会話にすぐのるほうである）および意思決定能力（Alpha＝.839：①目的実現のためには現在の状況をよく確認してから行動する、②物事を決めるには、みんなの反対意見をよく聞いてからにしようとする、③自分の行動の結果を予想してから行動するほうだ、④どんな問題にも2つの側面があるのだからその両方を見るようにつとめている、⑤目的実現にあたって関連する情報をなるべくたくさん集めるほうだ、⑥相手を批判する前に自分が相手の立場だったらどう感じるかと想像してみようとする）を質問項目とし、それぞれの項目に自分がどれくらいあてはまるかを「1.大変あてはまる　2.あてはまる　3.まああてはまる　4.あまりあてはまらない　5.あてはまらない　6.全くあてはまらない」から選んでもらった。そして情報収集行動については、9つのリスクについて、「これらのリスクについての情報を得ようとする場合、あなたはどのようなメディアを利用しますか。それぞれに該当する番号を3つまで選んで○をつけて下さい」と問い、対象メディアとして①週刊誌等の雑誌、②テレビニュース、③口コミ、④インターネットのウェブページ、⑤新聞、⑥大衆向けの解説書⑦専門的学術文献、⑧その他、の8つをあげた。さらに、自助意識を把握するため、「なにごとも自分のことは自分でやるべきだ（1.大変あてはまる・・・6.全くあてはまらない）」、および「万が一への備えは充分にすべきだ（1.大変あてはまる・・・6.全くあてはまらない）」を問うた。

参考文献

Flynn,C.K. & Slovic,P. & Merts,C.K.（1994）Gender, Race & Perception of Environmental Health Risks, *Risk Analysis*, 14, 1101-1108

吉川肇子（1999）リスク・コミュニケーション―相互理解とよりよい意思決定をめざして―、福村出版

Kleinhesselink, R. & Rosa, E.A.（1991）Cognitive Representation of Risk Perception: A Comparison of Japan and the United States, *Journal of Cross-cultural Psychology*, 22,11-28

小林定喜・神田玲子（2000）コンパラティブ・リスク、リスク学事典、252-253

Lazo,J.K. & Kinnell,J.C. & Fisher,A.（2000）Expert and Layperson Perception of Ecosystem Risk, *Risk Analysis*, 20, 179-193

村上陽一郎（2005）安全と安心の科学、集英社

Nara,Y.（2005）Possibility of Subjective Risk Management of Everyday Life, *Risk and Insurance Management*, 36

日本リスク研究学会編（2000）リスク学事典、TBSブリタニカ

岡本浩一（1992）リスク心理学入門、サイエンス社

Slovic, P.（1987）Perception of Risk, *Science*, 236, 280-285

NII-Electronic Library Service

The Journal of the Japan Association for Social and Economic Systems Studies

November 2005

Perception and Coping of Everyday Life Risk
: From the View Points of Self-help and Information-taking Tendency

Yumiko NARA

The University of the Air

Abstract

This study aims to examine the status quo of risk perception and risk coping of citizen, as well as the relationship between risk perception and risk coping with the data of questionnaire survey. Nine risks which would be happened in everyday life were presented ; strong earthquake, traffic accident, plunge in stock price or interest rate, dioxin, cancer, consumer damage on the Internet, defamation on the Internet, Internet stalking, and computer virus. As the results, it was found that citizens with low self - help consciousness and low information - taking tendency tend to feel the unknown and the dread of risk. This result has brought new objects, i.e. the possibility and necessity of the change of people's consciousness and attitude should be considered.

Keywords : everyday life risk, risk perception, risk coping, self-help consciousness, information

NII-Electronic Library Service